

能 杜若（かきつばた）

2025- 5 - 1

野口幹夫

10年以上前に金沢に旅行したとき、鼓型の美しい駅舎前広場に能杜若の銅像があった。その印象がいつまでも頭に残っていて、いつかこの能を見たいものと願っていた。それから10年 やっとこの4月、なじみの鎌倉能舞台でやるというので、念願がかない先週見てきた。鎌倉能舞台は鎌倉大仏への道のわきに入ったところにひっそりとある。観世とか喜多流などの伝統の流派ではなく、異色の学生出身の中森晶三という人が始めた能舞台で、伝統の流派に縛られない自由な演出で素人にはいい。字幕が出るし、始めと終わりに丁寧な解説がつく。だからファンも多い。私ももっぱらここで能を親しむようになった。

ところで演目の杜若はむろん花の名で、「いずれがあやめかきつばた」という言葉があるように菖蒲の仲間でも紫色の美しい花である。

演能の筋は次のようなものだ。伊勢物語を踏まえている。京に住むある僧が東国への旅に出て、三河の国に来た時に、川辺に杜若が今を盛りと咲いていたので、しばらく足を止め 眺めていた。

するとそこに、若い女が来て、僧に何をしているのか声をかけた。僧はこの花を眺めていると答えると、彼女は、ここは八つ橋という杜若の名所で、昔在原業平が都落ちを

して ここまで来た時、この花を見て感動。この花カキツバタの5文字を歌に詠みこんだと



ころだと教えた。その歌は 「**からころも きつつ馴れにし つましあれば はるばる来ぬ**
る たびをしぞ思う」。そして僧を自分の庵に泊らせ、夜に業平の残した唐衣や冠をかぶっ
て現れ、舞を披露する。僧の問いかけに応え、自分は業平が愛したカキツバタの精であると
名乗り、業平こそ救いの菩薩の生まれ替わりであり、彼によって草木も成仏できるのだと
喜びの舞のなか 白々と明ける夜の中に姿を消していく。

という奇想天外な物語だ。能は、元来死者のいるあの世と、この世の垣根がない。それば
かりか、この演目のように、草木や花までも人間に語りかけてくる夢幻の世界を現出してく
れる。

能は室町時代に大成したが、時代をさかのぼれば、平安時代に大陸から伎楽や雅楽が入り
宮中音楽として尊重された頃は、能をやる集団は散楽とか猿楽といわれ、やがて宮中から
は野に放逐された楽団だったが、その源流は縄文時代の仮面劇に発していると思う。この
杜若のように草木が人と交わるといった幻想はいかにも縄文っぽい。この辺りの能の来歴
については2019年5期ホームページに掲載した私の「能狂言 その縄文の源流からの軌
跡」に詳述したので興味がおありになる方はご覧ください。

<http://kozu5.my.coocan.jp/NohKyogen.pdf>

美しい杜若の精が豪華な唐衣をまとうので、そのシテの姿が銅像になるほど美しいわけだ。

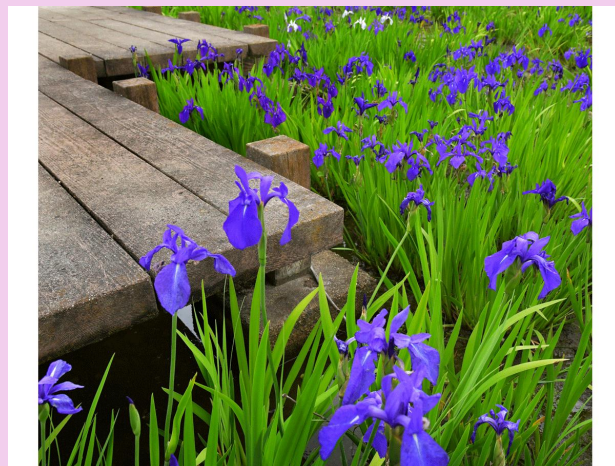
舞は静かだ。ほとんど立ち姿が基本で、ゆっくりした扇の動きが加わる。

最近のニューソングがすべて激しい動きの踊りを伴う世界とは真逆だ。この世には失われた
「静の中の美」に酔いしれた1時間であった。

知立市

史跡八橋かきつばたまつり

開催日：2025 年 04 月 25 日 ～ 2025 年 05 月 19 日



かきつばたまつりは、歴史も古く約 70 年前から行われており、全国から多くの観光客が訪れます。期間中は、いつでもかきつばたを鑑賞することができますが、ゴールデンウィーク頃が一番の見頃です。

八橋のかきつばたは、平安の歌人“在原業平”が、「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬるたびをしぞおもふ」と、句頭に「かきつばた」の 5 文字をいれて詠んだように伊勢物語の昔から知られるかきつばたの名勝地です。

庭園の面積約 11,130 m²、16 の池（1,786 m²）に「かきつばた」が植えられています。